

横浜みどりアップ計画市民推進会議 第60回広報・見える化部会 会議録	
日 時	令和7年8月26日（火）10時から12時まで
開 催 場 所	市庁舎18階共用会議室なみき19
出 席 者	大竹部会長、金井委員、河原委員、北原委員、酒井委員、飛田委員、望月委員（五十音順）
欠 席 者	なし
開 催 形 態	公開（傍聴なし）
議 題	1 市民目線での情報提供のあり方について 2 その他
議 事	<p>（事務局）</p> <p>本日はお暑い中、また、ご多忙の折にもかかわらず、委員の皆さまにはお集まりいただきまして誠にありがとうございます。ただ今から、「横浜みどりアップ計画市民推進会議第60回広報・見える化部会」を開催します。</p> <p>まず、本日の会議についてご報告いたします。本会議は、「横浜みどりアップ計画市民推進会議運営要綱」第7条第3項の規定により、半数以上の出席が会議の成立要件となっておりますが、本日委員定数7名のところ7名全員が出席されておられますので、会議が成立することをご報告いたします。</p> <p>また、本会議は同要綱第8条により、公開となっており、会議室内に傍聴席と記者席を設けています。本日の会議録も公開し、会議録には個々の発言者の氏名を記載いたしますので、ご了承ください。さらに、本会議中に写真撮影を行い、ホームページおよび広報誌等へ掲載させていただくことも、併せてご了承願います。</p> <p>続きまして、お手元の配付資料を確認いたします。配布資料は、次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・次第</li> <li>・資料1 市民目線での情報提供のあり方について</li> <li>・別紙1 チラシ案、別紙2、3のイラストのテイスト案</li> <li>・緑色のフラットファイル</li> </ul> <p>なお、緑色のフラットファイルには本日使用するスライドとみどりアップ計画の冊子がとじられています。参考資料としてご活用ください。</p> <p>議題に入る前に、事務局側の出席者を紹介します。</p> <p style="text-align: center;">（事務局参加者紹介）</p> <p>（事務局） 事務局からは以上です。 それでは、今後の議事進行は大竹部会長にお願いします。</p> <p>（大竹部会長） おはようございます。</p> <p>（一同） おはようございます。</p> <p>（大竹部会長） お暑い中、またご多忙の折、お集まりいただきましてありがと</p>

うございます。広報・見える化部会の次回開催まで時間が空くため、本日でできるだけ多くのことを決定したいと思いますので、皆さまの忌憚のないご意見をお願いいたします。

それでは、早速議題に入ります。「次第」の「1 市民目線での情報提供のあり方について」、事務局からご説明をお願いします。

(事務局説明)

(事務局) 「人生記念樹」の取材について、北原委員に対応をお願いしましたので、作成された記事や当日の様子についてお話しただけですでしょうか。

(北原委員) 「人生記念樹」の取材を、飛田委員と一緒に、6月2日に横浜市役所1階アトリウムにて行いました。市役所職員の方に市民の皆さんへお声掛けしていただきましたが、コメントを断る方はほとんどおらず、取材時に実感したのは、市民の皆さんは喜んで取材に応じてくださるということでした。

また、「この記事が載ったらぜひ知りたい」「お友達に伝えたい」とおっしゃる、非常にご協力的な市民の方もいらっしゃいました。そこで、広報についても市民参加型を検討し、例えば、取材にご協力いただいた市民にもこのことを広めていただくルートをつくるなどの戦略を立てれば、より広報効果が高まるのではないかと思います。

さらに、取材を通じて、「人生記念樹」の配布事業には、比較的リピーターが多いという印象を受けました。この事業をすでにご存じの方は、市が無料で苗木を配布していることを理解されていて、「何回も来ています」といった声もありました。実際に「5本目です」という方もいらっしゃって、そうした方々はコアファンとして継続的に参加してくださっているという点では、とても良いことだと思います。

一方で、同じ方が何度も同じ便益を受けているという状況と、まだこの事業を知らない方が初めて知って、木を植えるという行動に移してくださるという状況の、両軸がこの事業にはあると感じています。ですので、今後は、これまで知らなかった方々にもこの事業を知っていただき、木を植えるという行動変容につながるような広報の工夫も必要ではないかと感じました。

(事務局) ありがとうございます。インタビューの際に写真撮影も行いましたが、市民の皆さんは大変好意的でした。

(金井委員) 何本ぐらいの苗木を配布したのですか。

(北原委員) noteの記事に書いてありますので、ぜひ、ご覧ください。

(金井委員) そうですか。

(事務局) 「人生記念樹の配布」イベントの取材記事は、すでにnoteに掲載されております。後ほど、それをご覧いただこうと思います。

次に、ウェルカムセンターが運営するイベントとして、7月27日に寺家ふるさと村四季の家にて、「わさびとレジャの生き物実験ラボ」が開催され、大竹部会長と河原委員、金井委員が取材

をしてくださいました。

取材では、2組のご家族、2人の講師と四季の家の館長にインタビューしました。大竹部会長から当日の様子をお話してください。

(大竹部会長) 夏休みに入っていることもあり、今回のイベントは寺家ふるさと村の自主イベントとして小学生向けに開催され、12組24人のご家族が参加されていました。

イベントの内容も、私自身学ぶことが本当に多数ありました。子どもたちの身近な存在であるダンゴムシという小さな生き物を通して、その役割を地球という視点から捉えてみようというもので、緑、森や環境について親子で考える時間を提供するという趣旨でした。とても興味深く、面白い内容だったと思います。

私も初めて知ったのですが、講師のレジヲさんとわさびさんは、いずれも横浜にお住まいの方です。そのため、横浜市民が横浜市民に伝えていくという流れも大変素晴らしいと感じました。

この取材を通じて、あらためて広報の在り方を考えさせられました。なぜなら、寺家ふるさと村四季の家の館長さんにインタビューした際、「実際にこれをやる意味、目的をどういうふうに捉えていらっしゃるのか」という問いに対し、「自然に親しんでほしい」という非常にシンプルな答えが返ってきたためです。

もちろん、その思いも大切なのですが、できれば、関係者の皆さんには「みどりアップ計画」や「みどり税」といった仕組みを通じて、こうした取組が住民に還元されていること、そして自分たちはそのムーブメントをつくっている当事者であるという意識を持っていただけると、この場の在り方もさらに深まるのではないかと感じました。

レジヲさんもわさびさんも、本当に素晴らしい活動をされているのですが、私たちが「みどりアップの広報の一環として取材に来ました」とお伝えしたところ、「そんなすごい取組をされているんですね」と逆に驚かれ、「ぜひ、そういうことをもっと広めてほしいです」といった声もいただきました。

従って、目的を共有しながら場をつくっていく形に変えていければ、イベント自体の力もさらに高まるのではないかと感じました。

参加された方の中には、都内からの参加者もいらっしゃいました。もちろん、都内の方が参加してはいけないということではありませんし、参加者を区別する必要もないと思います。ただ、せっかく横浜で非常に良い取組をしているにもかかわらず、横浜市民の間でまだ十分に情報が届いていないことを残念に思いました。

ただ、感度の高い方が都内からでも参加されているということは、「良いものだ知っているから行きたい」という気持ちの裏返しでもあると感じ、このイベントが、もっと横浜の子どもたちに還元されるような仕組みになっていくといいと思いました。まさに、それこそが広報につながっていくのだと、現場に足を運んであらためて実感しました。

なお、参加された方には青葉区にお住まいの方が2組いらっしゃいました。青葉区は非常に自然豊かな地域ですが、「なぜ青葉を選ばれたか」と尋ねると、「自然や緑の中で子育てをしたかった」という回答がありました。皆さんは「緑が豊かで、大変良い場所だ」という認識をしていらっしゃったので、その方たちか

	<p>らママ友などを通じて、「横浜って本当にいいところだよ」と伝える、そういった情報が拡散できる仕組みがあると、さらに盛り上がっていくのではないかと感じました。</p> <p>以上が、今回の取材を通じての感想と考察です。</p>
(事務局)	<p>ありがとうございます。両イベントともに熱心に取材をして、記事も作成いただきました。現在、note への掲載準備を進めておりますので、掲載されましたら、ぜひご覧ください。</p> <p>それでは続いて、「取材記事の掲載方法について」、何度か言及した note について、あらためてご説明いたします。</p> <p style="text-align: center;">(事務局説明)</p>
(金井委員)	<p>3 日間で 1100 本の苗木を配ったとのことですが、苗木は全て配り終えたのですか。</p>
(事務局)	<p>目標数には達しませんでした。昨年度から苗木の樹種を変えたところ、以前よりもかなり応募が増えたと聞いております。</p>
(金井委員)	<p>非常に細かい話で申し訳ないのですが、人生記念樹の配布は 1977 年から始めたのですか。</p>
(事務局)	<p>「人生記念樹」としては、そのとおりです。</p>
(金井委員)	<p>累計で 10 万本以上の「人生記念樹」を配布したのですか。</p>
(事務局)	<p>はい。</p>
(金井委員)	<p>今回の配布本数が 1100 本ということは、48 年間の平均値よりも低いですね。</p>
(事務局)	<p>1100 本は市庁舎での配布本数で、他に農協などでも配布しています。</p>
(金井委員)	<p>配布本数については、窓口の方々が「立て板に水」ではないのですが、少し過剰なくらいに説明してくださるくらいでないと、こちらとしては少し不安になってしまうのですよ。</p> <p>「人生記念樹」が始まった頃はもっと多くの苗木を配っていたのだけれど、いろいろな事情があって、期待していたほど数字が伸びず、現在は 3 日間で 1100 本ということになったのでしょうか。</p> <p>その辺りの実態が分からないと、どんどん進化しているのか、あるいは少し停滞気味なのかということも判断できず、対策の立てようもないと思うのです。</p> <p>別に厳しく言いたいわけではないのですが、数字の把握などが少し緩いのではないかという感じがします。</p> <p>話は少し変わりますが、寺家ふるさと村の昆虫教室のイベントは、先ほど大竹部会長がおっしゃったように、大変よくできていました。にもかかわらず、ほんの一部の人にしか知られていないのはもったいないと思いました。そこで、あのようなイベントを撮影して、学校の授業等に活用してもらえば、効果も全く違ってくると思います。</p> <p>もちろん、市職員の皆さんもいろいろな業務があって大変だ</p>

と思いますが、少し工夫するだけで、認知度が飛躍的に高まると思います。失礼な言い方かもしれませんが、これまでの取組を振り返ると、あまり積極的に認知度を高めようとする視点がなかったように感じます。

先の会議で他の委員が「数値目標を達成して、『9割、10割できました』と言うのは結構だけど、認知度は上がっていないじゃないか」と言われていましたね。

いろいろな大人の事情があるのかもしれませんが、部局間のコミュニケーションも今一つうまくいかず、何となく認知度向上の部分が手付かずになり、永遠のテーマになってしまっているように思います。

しかし、そこを変えないと、このメンバーで5年間活動しても、5年後の今日も、「結局、認知度は上がりませんでしたね」ということでは、活動する時間が非常にもったいないと感じます。やるからにはもう、「すごく変わったよね」と言えるようにしたいのです。

皆さんが真面目に取り組まれているのはよく分かりますが、その努力が結果に十分に結び付いていないような気がします。

いまだに認知度調査を郵送で行っているとお聞きし、大変驚きました。やはり今の時代、インターネット調査で実施したほうが幅広い層の方からの回答が得られると思います。

また、広報・見える化部会で議論した結果、「子育て世代」と「学生」とをターゲットにすることになりましたが、彼らにどこまで情報が届いているかが分からないと、いつまでたっても認知度は上がりません。しかも、年1回の調査では、このスピード重視の時代にしてはあまりにもゆったりし過ぎています。

認知度調査を行う業者が決まっているなどさまざまな事情があるかもしれませんが、それならば、その業者にインターネット経由の認知度調査を実施してもらえばいいだけです。

せっかくみんなが一生懸命に話し合っても、そこを少し変えて、肝心の「あと一歩」、「あと半歩」が出ないと、結果に結び付かないと思います。やはり、認知度が上がらないと、どうしようもないですね。

今回の市長選では、複数候補者が「みどり税廃止」を訴えています。本来なら、世論に関係なくほとんどの人は反対せず、支持するような話なのに、「みどり税廃止」などと言うのです。普通は選挙スタッフ等が、「これに反対したらまずいですよ」と言うような話なのに、そういう意見が出してくるのは、認知度が低いことの証左だと思うのです。

「こういう理由でできない」ということであれば、それをお聴きしたいですし、「そんなことはないです」ということであれば、やり方を少し変えていけばいいのではないですか。

私はこのとおりリタイアしていて、詳しくは分かりません。ただ、行政と民間の差を強く感じます。

(大竹部会長) ありがとうございます。事務局から何かありますか。

(事務局)

ご指摘のとおりだと思います。

ちなみに、昨年度の実績で言えば、8000本を目標としていたところ、約7000本の苗木を配布しております。

また、先ほども申し上げましたが、昨年度から苗木の種類の見直しを行いました。若者のニーズの高い樹種やベランダでも植えやすい樹種を選定しました。また、「ガーデンネックレス横浜」

のイベントと連携するなどの工夫を取り入れたことによって、この7000本という配布数は、前年度よりも増加していると聞いています。

今年も目標本数を8000本とし、春と秋の2回の配布を行います。まもなく秋の配布が始まりますので、担当する事業部署と連携しながら、しっかりと取り組んでいきたいと考えています。

(金井委員) いろいろ申し上げましたが、1977年までさかのぼる必要はないと思います。ただ、少なくともこの10年、15年の間の配布本数の推移、例えば、目標5000本に対して4500本の配布数などといったデータがないと、私たちも、どの程度認知されているのかが分かりません。そういったデータが不足しているように感じます。

過去の配布本数のデータですから、おそらく、それほど手間を掛けなくても出てくると思います。それらを見れば、何が問題なのかも見えてくるはずですよ。

みどりアップ計画でやっていること自体は大変素晴らしいことですが、やはりもっと広く一般市民の方々に知ってもらわないと、もったいないですよ。

「人生記念樹」の配布に5回目の方がいても悪くはないのですが、「そういう企画があるなら、自分も参加したい」という市民がいるかもしれませんし、そうした方々の声が市に届くような仕組みにしないといけないと思うのです。記念樹をもらったらそれでおしまい、という感じになってしまうのは、やはりもったいないと思いますね。

(事務局) 先ほどの寺家ふるさと村のイベントと同じく、参加者に簡単なアンケートを実施して、「どこから来ているか」、「イベント情報をどこから入手したか」といったデータを集めれば、どの世代に、どのように情報が届いたかを分析できますので、そういったところも、担当事業部署と相談しながらやっていきたいと考えております。

(金井委員) ぜひ、お願いいたします。

(飛田委員) この件について、先ほど東京都から来られた方も参加しているとのお話もありましたが、自然関係の活動に関わる人たちの間では、横浜市は非常に有名であり、全国各地から多くの方が訪れます。

そのような方々の中には、愛護会の運営などに対して予算支出を求めるような形で介入してくるケースも見受けられます。例えば、「チョウが大好き」、「カブトムシ命」といった方々が、「どこか資金を出してくれる自治体はないか。横浜市はどうか」といった流れで、税金を納めていないにもかかわらず突然現れて、さまざまな形で圧力をかけてくるという事例が実際に起きています。

こうした状況を、今回の市長選に立候補された方々が目にして、「おや」と感じられても、それは当然のことと思います。

いわゆる「利益団体」とまでは言えないものの、「カブトムシ推し」、「チョウ推し」といった方々が全国を飛び回り、横浜市の周辺にも集まってきている現状について、一定の認識を持っていただく必要があるのではないのでしょうか。

今回のように、講師の方に講師料をお支払いしたケースでは、

	<p>お二人とも横浜市民であり、税金も納めておられる方々ですので、リーズナブルであると考えます。</p> <p>非常に質の高い講義をされたと思いますが、こうしたレベルの講師を招き、横浜市民への還元という観点から人選を行ったのであれば、仮に大阪など、遠方からいらしている場合、「それはおかしいのではないか」という声が上がっても不思議ではない状況です。私の知る限りでは、現在、こうした動きが「暗躍状態」にあると認識しています。</p> <p>(金井委員) かなり怖い話ですね。</p> <p>(飛田委員) しかし、彼らに悪気はないのです。</p> <p>(金井委員) もちろんそうですよ。だから、それをチェックすればいいわけですからね。</p> <p>(飛田委員) その「チェックする」ということについてですが、チェック対象となる方々は全く組織立っていないのです。例えば、私が炭焼き小屋でコツコツと整備作業などをやっていると、「あなたは飛田さんですか」と突然現れる方がいました。その方は東京都からいらした方で、「ここは素晴らしい所ですね。ところで、森の保全について、予算をどう考えているのか」といったような、さまざまな活動案を提示されました。</p> <p>それを私たちに提案してくださるのは構わないし、私たちがそれを取り入れて実施するのであれば、それはそれでいいと思います。しかし、例えば、ある程度の謝礼が発生するような活動にその方たちが加わり、その方たちの案に基づいた活動が行われ、そこに謝礼が支払われるとなった場合、税金の支出を伴うその活動が妥当であったかどうかをチェックする仕組みがどこにも存在しないのです。</p> <p>横浜市民がそれを「そうだ」と言っているのであれば、税金を納めている立場ですから、「それは良いことだ」となると思うのですが、他都市の方に言われてしまうと、なぜ？という疑問が生じます。実際に、そうしたことはすでに発生しています。</p> <p>従って、その辺りの状況については、ある程度認識していただいたほうが、市長選でのああいった議論にならないのではないかと感じています。</p> <p>(事務局) 今のお話について確認ですが、例えば、市民の森の愛護会の活動に、東京都などの他地域の方が例えばカブトムシの保全を目的として、参加されるということですか。</p> <p>(飛田委員) そうです。</p> <p>愛護会の役員会などでは、愛護会の活動内容や交付金の使途について協議・決定しています。もし、横浜市民ではない他地域の方がそこに参加した場合、税金を納めていない方が意思決定に関与し、謝礼を受け取るということになります。</p> <p>その方々が商売的な目的で参加しているかどうかは定かではありませんが、ある程度の利害関係を持って入ってきています。そうした方々が理事会や役員会で謝礼を受け取りながら、愛護会の活動に対して「あれをやってほしい」、「これを進めてほしい」といった指示を出すようなことが起きるわけです。</p> <p>横浜市民ではなく、税金も納めていないのに、謝礼を受け取る</p>
--	---

	<p>といった状況に対しては、「それはおかしいのではないか」という疑問を持たざるを得ません。</p>
(金井委員)	<p>その謝礼はどこから出るのですか。</p>
(飛田委員)	<p>愛護会が市からもらった分から支払われます。 愛護会員には国籍制限ありませんので、横浜市内在住でみどり税も払っているインド人の方もいます。横浜市は大変オープンであり、皆で取り組む活動に対して多様な意見が出され、それによって前に進んでいくという点は非常に素晴らしいことだと思っていますが、先ほどお話ししたような事態にもなっています。</p>
(事務局)	<p>それによって、市民の森愛護会が乗っ取られるような事態にはまだなっていないという認識で良いでしょうか。</p>
(飛田委員)	<p>それは分かりません。</p>
(事務局)	<p>今のご意見は、横浜市外の方がすでに愛護会に参加されているということですか。</p>
(飛田委員)	<p>すでに参加しており、今後、そうした方々が実際に市民の森などの保全に関する意思決定に深く関与し、横浜市に対して予算の支出を求めるような動きが起こり得るということです。</p>
(金井委員)	<p>それは、条例などで規制できないのですか。</p>
(事務局)	<p>各愛護会結成時のメンバーについては、国籍や居住地などを厳密に確認するといった義務化はしていません。</p>
(金井委員)	<p>あまり想像を膨らませ過ぎるのもよくないと思いますが、仮に、「カブトムシの仮面をかぶった活動家」のような方が入り込んでくると、冗談ではなくなってしまう可能性もありますね。そこまで極端な例ではないにしても、少し不自然な印象を受けます。</p>
(飛田委員)	<p>そうした事態を防ぐためには、やはり横浜市民の皆さんに、「自分たちの裏庭は自分たちで守りたい」という意識をもつただけことが重要だと思います。意識改革というほどではありませんが、もう少し積極的に関わってもらえるような流れをつくりたいと考えています。</p>
(金井委員)	<p>私は、今の話を初めて聞いたのですが、皆さんはいかがですか。初耳ですか。</p>
(事務局)	<p>正直、我々も初耳です。</p>
(金井委員)	<p>やはりそうしたことが起きているのかもしれませんが、表立っては見えませんが、ひそかに進行しているような気がします。</p>
(飛田委員)	<p>ひそかに進行していると思います。ある市民の森の場合は、過去に某大学の研究室が中心となって、「ああしなさい」「こうしなさい」といった指示を出して仕切っていた事例があったようで</p>

	<p>す。</p>
(事務局)	<p>愛護会の活動に関しては、これまで高齢化の進行や新しい参加者なかなか入ってこないといった課題がありました。そのため、参加者の条件を厳しく制限してしまうと、かえって人が集まらず、新しい担い手が増えないという問題も生じていたと思います。</p> <p>一方で、活動が盛んになり、知名度が高まることによって、別の形の弊害が出てきているということですね。</p>
(飛田委員)	<p>横浜の森は、実は有名ですから。</p>
(事務局)	<p>そうですね。前回も、トレイルランニングに関するお話もあったかと思います。愛護会の制度は長い歴史を持つものですが、現在の社会状況を踏まえて、より適切な運用が求められているのではないかと感じています。</p> <p>本日いただいたご意見については、すでに同様の相談が寄せられている可能性もあるため、引き続き、所管部署との情報の整理と共有を進めてまいります。</p>
(飛田委員)	<p>愛護会としては、人手が欲しいという事情もあるため、そうした相談はしないと思います。ただ、地元の方々の中には、「それはおかしいのではないか」とおっしゃる方もおられます。</p> <p>例えば、「カブトムシばかりを大切に、なぜチョウは見てもらえないのか」といったような、性質の違いご意見が出てくることもあります。</p>
(事務局)	<p>そうした状況があることを把握いたしました。</p>
(望月委員)	<p>ただ、難しいですね。愛護会は行政組織ではなく、基本的には、あくまでも任意団体です。横浜市としては、「愛護会の活動に対して補助を行う」という仕組みの中で、その活動内容をどのようにチェックするかという視点で対応するしかないのではないですか。</p>
(事務局)	<p>おっしゃるとおりですね。</p>
(望月委員)	<p>運営自体は任意団体のため、どのような活動を行うかについては構成員の皆さんで決定していただくしかありません。市としては、その「運営」について確認するというよりは、横浜市の趣旨に合致した「活動」であれば、その活動自体に対して援助を行いますという立場になります。</p> <p>「どこで、どのような活動が実施されたか」については、横浜市として確認し、みどり税由来の計画に基づく支出についても全てチェックをしていると認識しています。現状では、横浜市としてそのような対応しか取れないのではないかと、今のお話を聞いて思いました。これはもうやむを得ないことだと思います。</p>
(事務局)	<p>この記事には3名の生産者さんのインタビューが掲載されています。その方々にはアップロードの前に記事をご確認いただきましたが、大変喜んでくださいました。そのことについてもご報告させていただきます。</p>

(望月委員) 私はスマートフォンを使ったのですが、「Yokohama みどりアップ Action」で検索すると、すぐに表示されます。

(飛田委員) 私も「スキ」を付けました。

(望月委員) X経由でも note にたどり着けますね。

(事務局) 委員の皆さまも、ぜひ、note をご覧になり、「スキ」を付けてください。よろしくお願ひします。

それでは、note への記事掲載にあたっての取材から記事公開の流れについて整理しましたので、ご説明いたします。

(事務局説明)

(大竹部会長) ありがとうございます。

それでは、ご説明いただいた『Yokohama みどりアップ Action』の情報発信について、委員の皆さまからご意見やご質問を伺いたいと思います。発信の方向性や、その後の流通方法などについてのご提案がありました。これに関して何かご意見やご感想があれば、お聞かせください。

(北原委員) さまざまな検討を重ねていただき、ありがとうございます。特に、みどり環境局主幹で実施されている取組については、もれなく丁寧に対応されている印象を持っています。

追加の提案として、「はまふうどコンシェルジュ」のメーリングリストを活用してみたいかでしょうか。現在、約 500 名の登録者がいると思われるので、そうした方々への情報発信も有効だと思います。

また、note に関しては、「スキ」の件数が一つのベンチマークになるかと思ひます。横浜市には複数の note アカウントがあり、教育委員会のアカウントは比較的反響が大きいようです。教育委員会がどのような工夫で注目を集めているのか、ヒアリングしてみるのも有意義ではないでしょうか。

もちろん教育分野は広く関心を持たれやすい一方で、緑に関する情報も、本来は広く共有されるべき内容です。ただ、実際には行動に移す層に限られる傾向にあり、コアなファン層が中心になることも想定されます。

そのため、まずはそうした方々に「スキ」を付けてもらうことから、一つの簡単な行動につながると思ひます。私自身も、自分の SNS などを通じて、「『スキ』を付けてくださいね」と呼び掛けていきたいと考えています。一つ一つ、丁寧にできることを実施していけば、最終的にはより広範な認知につながると思ひますので、今後も多様な方法をご検討くださるとうれしく思ひます。

(大竹部会長) ありがとうございます。その他にはいかがですか。

(望月委員) 少し余談になりますが、「YOKOHAMA GO GREEN」の X アカウントについて触れておきたいと思ひます。現在、フォロー中が 21、フォロワー数が 9120 件になっているようで、かなり伸びてきています。まもなく 1 万フォロワーに達する見込みであり、非常に多様な情報が集まっている印象です。ここが一つの重要なポイントではないかと感じています。X ではリンクの貼付が容易で、

	<p>広報の観点から見ても、情報の流通に適した媒体です。</p> <p>情報をウォッチする際には、「YOKOHAMA GO GREEN」のアカウントからだど、行政のみなさんはチェックしやすいのではないのでしょうか。</p> <p>最近は、「こども『エコ活。』大作戦」といった取組も紹介され、実際にさまざまな情報が発信されています。</p> <p>ちなみに、このキャラクターはなんというのですか。</p>
(事務局)	「ミーオ」です。資源循環局のキャラクターで、ごみ袋をモチーフにしています。
(望月委員)	ごみ袋を締めているわけですか。
(事務局)	そうです。
(望月委員)	これは非常にアクセスしやすいですね。「YOKOHAMA GO GREEN」のロゴマークもきちんと作られたのですね。
(事務局)	はい。「YOKOHAMA GO GREEN」は、全庁で積極的に推進している取組です。関連する広報物などには、ロゴを必ず掲載するようにしています。
(望月委員)	GREEN×EXPO 2027 もありますからね。
(事務局)	そうですね。
(望月委員)	フォロワー数の観点からも、「YOKOHAMA GO GREEN」のXアカウントで情報を発信することで、その情報が一気に広まる可能性があると感じています。やはり紙媒体だけで情報を届ける時代ではないのだと感じています。
(大竹部会長)	<p>ありがとうございます。他の皆さんはいかがですか。</p> <p>1点、質問させてください。「人生記念樹」の主な対象層は「子育て世代」と記載されていますが、私自身も、子どもが小学校に上がるタイミングでモッコウバラを植えた経験があります。小学生を対象とした「すぐーる」や教育委員会との連携は、「もちろんそうだよね」と思っていました。それよりも下の年齢層も重要なターゲットではないかと感じています。</p> <p>Xアカウントのフォロワー数が9000件を超えているとはいえ、横浜市は人口が378万人です。そのうち、どのくらいの方が対象になるのかは把握していませんが、まだまだ情報が届いていない層が多いのではないかと思います。横浜市の規模が大きいため、情報の浸透には工夫が必要です。</p> <p>例えば、保育園や幼稚園、住宅の新築時など、「子育て世代」が「何か記念を残したい」と思うタイミングはさまざまです。特に女性の方は、そうした記念を大切にされる傾向があるのではないのでしょうか。出産前後や予防接種など、乳幼児に関わる場面でも接点があるように思います。そういった場面ですぐに活用する情報でなくとも、「人生記念樹」についてインプットすることは重要なことだと考えます。</p> <p>未就学児の保護者やこれから親になる世代の方々に向けて、情報発信の場をもう少し広げることができないのでしょうか。すでに何か取り組まれていることがあれば、ぜひ、教えてください。</p>

い。

(事務局)

「すぐーる」などを通じた情報発信はこれまでも行ってきましたが、今のお話を伺って、例えば、乳幼児の定期健診の場面や、不動産購入時の情報提供など、新たなニーズとして開拓できる可能性があると感じました。こうした接点に対して、事業担当部署と連携しながら、働き掛けの方法を検討してみる価値があると思います。すでに何らかの検討が進んでいる可能性もありますので、あらためて相談させてください。

また、先ほど触れたように、マンションやベランダで植えやすい樹種を選定していることが、申し込み数の増加につながっているようです。これまで「庭がないから申し込みなかった」という方々にも届くようになってきたことで、対象層が広がっていると感じています。

今後は、そうした樹種の特徴を生かした情報発信も視野に入れながら、より多くの方々に届けられるように工夫していきたいと考えています。他の所管部署とも情報を共有し、新たな広報展開の可能性について検討を進めていきます。

(飛田委員)

神奈川県で森林関係でファンディングをしたいという話がありました。特に子どもに関する取組については、医師会の協力を得ることが非常に重要だと考えています。

横浜市の医師会の影響力は非常に大きいと聞いています。例えば、医師会から市内の産科や小児科などにパンフレットをまいていただくといった形で配布するのは有効ではないでしょうか。

(事務局)

貴重なご意見をありがとうございます。

(大竹部会長)

皆さん、いかがでしょうか。  
もし差し支えなければ、ここで一区切りとし、次の議題へ移らせていただきたいと思います。  
それでは、子育て世代向けの「チラシ案について」、ご説明をお願いします。

#### (事務局説明)

(大竹部会長)

ありがとうございました。  
それでは、今ご説明いただいたチラシ案について、委員の皆さまからのご意見やご質問を伺います。  
検討事項は、表面のイラストのテイスト、キャッチコピーの選定、裏面の記載内容の3点です。  
まず、事務局からの説明を踏まえて、全体的なご質問やご意見などがあれば、お聞かせください。

(金井委員)

横浜市としては、この「はじめてのみどりアップ」を推しておられますか。

(事務局)

そういうわけではありません。あくまで、「このような形で掲載される」という仮の案です。

(金井委員)

「みどりアップ計画って何？」という市民の方が多い中、それを周知するという意味では、「はじめてのみどりアップ」を使う

のも悪くないと思います。ただ、もう一言、何か加えられないかという気もします。普段から活動されている他の委員さんのご意見も伺いたいです。

それからもう一点、余談かもしれませんが、「PLACEMAKING JAPAN」という表記についてです。最近横文字が多用されがちですが、私の理解では、「居心地の良い、あるいは、機能的な場所を市民と行政が協力してつくり上げるプロセス」を指す概念だと思います。ただ、この言葉を知っている市民がどれくらいいるかという点は気になります。委員の皆さんは日頃からかつそうされているので、「これはもう業界では常識ですよ」とおっしゃるかもしれませんが、一般の方にとってはなじみがない可能性もあります。

(事務局) この「PLACEMAKING JAPAN」とい表記は、テイストや全体の雰囲気伝えるためのもので、実際に使用するわけではありません。

(金井委員) そうですか。やはり、多くの方に知ってもらうためには、安易に英語表現を使わないほうがよいと思います。言葉の印象だけで受け取られてしまい、意図が正しく伝わらない可能性もあります。

(大竹部会長) ありがとうございます。  
全体を通して、他にご意見やご質問はありますか。

(飛田委員) キャッチコピーには、「横浜」という言葉を入れたほうがよいと思います。「みどりで遊ぶ」だけだと、例えば、「オーストラリアでも可能なのでは？」といった印象を持たれるかもしれません。

(事務局) 確かに、パッと見たときに、「これは横浜の取組だ」と分かるような工夫が必要ですね。

(飛田委員) その点が明確に伝わるほうがよいと思います。

(河原委員) 「横浜シティ」や「横浜のみどり」といった表現のほうが、すっきりしていて目的がわかりやすいのではないかと感じます。

今回、たくさんの方のご提案いただき、文字数もかなり調整してくださったことには感謝していますが、さらに簡潔にできないかという印象もあります。

「こんなにいっぱい 横浜のみどり」よりも、「横浜」をひらがなにして「よこはまのみどりで遊ぶ」、「あそぶ よこはまのみどり」、「はっけん！ よこはまのみどり」といったように、「横浜」、「みどり」、「触れたい」という三つの要素が入っていると、より伝わりやすいのではないかと、個人的には思っています。

私自身もマルシェを開催したり、横浜市役所でイベントを行ったりする機会がありますが、そうした場で配布する際には、「横浜の緑ってこんなにいろいろできるのですよ」と伝えたい気持ちがあります。その意味でも、「横浜」という言葉がキャッチコピーに含まれていたほうが、より効果的だと思います。

(大竹部会長) ありがとうございます。

	<p>他の皆さんはいかがですか。今回のチラシは「子育て世代」を主な対象としていますが、若者層も非常に重要なターゲットだと考えています。酒井委員、チラシをご覧になったご感想をお聞かせいただけますか。</p>
(酒井委員)	<p>チラシは恐らく、イベントなどで配布されると思いますが、そこで実際に塗り絵をしてもらったりするのですか。そうすると、子どもが塗る割には少し絵が細か過ぎるように思います。</p> <p>現在想定されているターゲット層と、このチラシのクオリティを照らし合わせたときに、せっかく子どもにも配るのであれば、子どもが読みやすいように「ふりがな」を振るなどの工夫も検討したほうがよいのではないかと思います。</p>
(河原委員)	<p>細かい点ですが、なぜニンジンを描いているのかが少し気になりました。横浜であれば、ニンジンよりもキャベツやコマツナなど、横浜で多く収穫されている野菜を描いたほうが、「横浜のみどり」というテーマにより合っているのではないかと思います。</p> <p>ただ、紙面全体が緑色ばかりになってしまうため、彩りの面ではニンジンのほうがよいかもしれません。</p>
(河原委員)	<p>収穫体験であれば、イモなどがあるかもしれません。その実態に合わせた野菜を描くのか、それとも、イメージ重視で選ぶのか、その辺りの方針も検討が必要ですね。</p>
(河原委員)	<p>必ずしも特定の野菜にこだわらず、ふんわりと「野菜らしさ」を表現するだけでもよいのではないかと思います。チラシの配布時期に合わせて、収穫される野菜を反映されるなど、柔軟な対応も可能かもしれません。</p>
(飛田委員)	<p>費用は掛かるかもしれませんが、ニンジン・キャベツ・コマツナのシールをそれぞれ用意して、選んで貼ってもらうという方法も面白いかもしれません。少し無理がありますかね。</p>
(事務局)	<p>「お好きなのを貼ってください」という形も、楽しみながら参加してもらえる工夫としてはよいかもしれません。</p>
(飛田委員)	<p>例えば、「今日はおイモの日なので、おイモのシールを貼ってください」といったような方法も面白いかもしれませんね。</p>
(河原委員)	<p>そうすると、配布できるイベントが少し狭まってしまうかもしれませんね。</p>
(大竹部会長)	<p>他の皆さんはいかがですか。</p>
(北原委員)	<p>以前、小学生向けに地産地消の普及教材を作成したことがあります。その際に感じたのですが、ターゲットの年齢によって使用する漢字の選定が大きく変わってくるため、あらかじめ、「何年生以上を対象にするか」という方針を定めておくと、制作時の判断がしやすくなると思います。</p> <p>例えば、「横浜」の「浜」は中学生レベルの漢字とされていますが、「横浜」という言葉自体は、「横浜の時間」という教育プログラムでも使われているため、漢字表記でも問題ないと考えら</p>

れます。

ただ、それ以上の漢字になると、ターゲットによって読めるかどうかが変わってきます。ふりがなを付ける方法もありますが、そうすると、文字量が増えてしまい、デザイン面での制約が大きくなります。

そのため、対象年齢を明確に設定した上で、「なぜ、この表現を使っているのか」という根拠を持っておくことが重要です。例えば、「小学3年生以上を想定しているため、この漢字表現を採用しました」といった説明ができると、制作側としても安心して進められるのではないかと思います。

発行元の情報も重要ではありますが、QRコードで誘導する形で十分かもしれません。実際に手に取る人の視点で考えると、最低限「見える化部会」の表記や、問い合わせ先だけでも十分ではないかと思います。

現状、一番下の段に情報が集中していて、全体の伝えたい内容に対してボリュームが多すぎる印象があります。誰をターゲットにして、誰に必要な情報なのかという点を明確にした上で、掲載内容を絞り込んで整理していただけると、より伝わりやすくなるのではないのでしょうか。

(大竹部会長)   ありがとうございます。他の皆さんはいかがですか。  
今のお話を伺っていると、「絞る」といっても、具体的にどうすればよいのかが、なかなか難しいですね。

(北原委員)     確かに難しいところですが、やはり「万人に知ってもらいたい」という思いがある一方で、「万人に知ってもらうために、あえてここに絞る」という方針を持つことが大切だと思います。

(大竹部会長)   私自身が強く感じているのは、このチラシを見て「自分に関係している」と思ってもらえることが非常に重要だという点です。そう思ってもらうためには、どのようなキャッチコピーが適しているのかをずっと考えていました。

やはり、まずは関心を持ってもらい、QRコードを読み込んでもらわなければ情報が届かないまま終わってしまいます。裏面のコンテンツについても、「これはみんなの未来につながっている」、「みんなの暮らしの役に立っている」、「私自身に関係している情報である」といった視点で、どうすればそう感じてもらえるかをあらためて考える必要があると感じました。

皆さん、いかがですか。現在、横浜市さんが丁寧に内容を整理してくださっている中で、市民としてどちらの方向性がよいか、ある程度、意見を出していく必要があると思います。今までのご意見を踏まえつつ、イラストのテイスト、キャッチコピー、裏面の記載内容について、ある程度の方向性を決めていけそうですか。

キャッチコピーとイラストについては、最終的には多数決で決定するかもしれませんが、私たちの意思を示す必要があると考えます。

この段階で、「もう少し、こういう点を再考してはどうか」といったご意見やご質問があれば、ぜひ、お聞かせください。

(河原委員)     もし、ターゲットを小学3年生以上に絞るのであれば、どちらのイラストが子どもたちの心がときめくのかは、正直なところ分かりません。ただ、大人を目線で見ると、私はA案のほうが好

	印象です。でも、B案もかわいらしくて、楽しそうな雰囲気があります。
(飛田委員)	横浜の子どもたちが自分の周囲のイメージとして、A案、B案のどちらをより身近に感じるかではないでしょうか。
(金井委員)	それは、住んでいる地域によって異なるのではないのでしょうか。
(大竹部会長)	このイラストはマンションのような雰囲気がありますね。もちろん、これがそのまま使われるわけではないと思います。
(河原委員)	ただ、最近の絵本等の描写などを見ると、B案のテイストのほうがしっくりくる印象もあります。
(北原委員)	質問してもよろしいですか。裏面は「葉っぱー」メインで考えていますか。
(事務局)	「葉っぱー」は何らかの形で入れたいと考えています。
(北原委員)	なるほど、そういうことですね。
(事務局)	イラストの数等は調整できますので、ご意見いただければと思います。
(北原委員)	こうしたキャラクターの認知は、実は非常に重要だと思っています。「見たことがある」という刷り込みが、認知度を高める上で大きな役割を果たします。 もちろん、デザインや雰囲気を重視する場合は、キャラクターをあまり入れないという選択肢もありますが、認知を促進するという観点からは、「葉っぱー」を積極的に登場させることも有効ではないかと感じます。
(河原委員)	表面にニンジンが描かれているのは、裏面の「葉っぱー」がニンジンを持っているからなのですね。
(北原委員)	「人生記念樹」の配布の際も、「葉っぱー」のぬいぐるみがあると、子どもたちが近づいてきてずっと抱っこしているような様子も見られました。
(河原委員)	そうですね。かわいらしい印象があります。
(北原委員)	今回のチラシは内容そのものよりも、認知やイメージの形成が重要だと思いますので、全体的に緑を基調としたカラーリングにするという方向性が適していると考えます。
(河原委員)	緑色をベースにしつつ、赤などを加えることで、かわいらしさや視認性が高まり、より映えるのではないのでしょうか。
(北原委員)	差し色として赤を使うのは効果的だと思います。
(大竹部会長)	皆さん、いかがですか。他にご意見などはありますか。

	<p>(河原委員) 表面は塗り絵にする予定ですよ。つまり、どちらの案を塗り絵のベースにするかという話ですよ。</p> <p>(事務局) 塗り絵については、人物の部分はあらかじめ塗ってある状態で、背景を自由に塗ってもらう形式を想定しています。</p> <p>(北原委員) 区民まつりなどのイベントでも、各区でこうした塗り絵を活用できるため、単に配るだけのチラシよりも汎用性が高いのではないのでしょうか。</p> <p>(河原委員) あとは、好みとイメージの問題ですね。</p> <p>(大竹部会長) 皆さん、他にご意見はありますか。 最終的な決定については。やはり多数決になるのではないかと思います。好みの要素も含まれてしまいますが、それで決める形でもよろしいですか。「われわれとしてはこういう方向性です」といった提案をだけここで事務局にお示しておこうと思います。 それでは、A案、B案のどちらがより適しているのか、このチラシに当てはめたときにどちらのデザインが市民の皆さんに響きそうかという視点で、挙手をお願いします。 まず、A案がよいと思われる方。ありがとうございます。続いて、B案がよいと思われる方。</p> <p style="text-align: center;">(挙手)</p> <p>(大竹部会長) ここに何が来るのかが分からないため、判断しづらい部分がありますね。 多数決の結果、A案のほうが多かったのですが、少しイメージが湧きにくいという点はあるかもしれませんね。</p> <p>(飛田委員) ミライトワとソメイティを決めたときのように、子どもたちにどちらがよいかを聞いてみるのもよいかもしれません。実際、あときは東京都内の数校の児童に見せて回答してもらったのです。児童の人数はそれほど多くはありませんでした。</p> <p>(大竹部会長) 「ウォーリーを探せ」的な要素があるとすれば、B案のほうがいいかもしれませんね。</p> <p>(金井委員) B案は楽しそうに見えますね。どちらにも良さがあり、決め手がないため、どちらかを選ぶことは難しいですね。</p> <p>(北原委員) A案もB案も、イラストのテイストやデザインの方向性という面から見ると、全体的にかなり近いような印象です。従って、A案・B案のどちらかを選ぶのは、かなり難しい判断になると思います。もし、色がない状況で比較すると、セグメントとしては非常に近い領域での選択になりますし、最終的には仕上がったイラストを見て判断するという流れになるのではないかと感じています。</p> <p>(河原委員) 私もそう思います。恐らく、少し大人っぽい感じか、少し幼い感じかという程度の差ではないのでしょうか。</p>
--	--

	<p>(北原委員) 確かに、それくらいの差ですね。もし、これがもっとアニメ調や、線画ではなくてベタ塗りのテイストであれば、はっきりとした差異があると思いますが、今回は同じカテゴリの中で非常に細かな差を比較している状況です。最終的には、実際に仕上がったイラストを見ての判断になるかと思います。</p> <p>今後のスケジュールを見ると、意見を出せる機会は今日しかありません。従って、「こういう意見が出ていた」ということを共有した上で、あとはお任せするような形になるかと思います。</p> <p>(大竹部会長) そうですね。</p> <p>(北原委員) 私自身、仕事でこうしたデザイン制作に関わることもありますが、ある程度まとまった段階で、あちこちからいろいろな意見が出てくると、工数的に非常に厳しくなります。従って、河原委員に、「こういうことを伝えたい」という本筋だけをしっかりとお伝えして、あとはお任せするという形がよいのではないかと思います。</p> <p>(事務局) A案をベースに制作を進めていただく予定ですが、今後の制作過程においては、皆さまのご意見を踏まえながら、必要に応じて調整を行ってまいります。</p> <p>(大竹部会長) 森、農や緑といった要素が整列して配置されているため、全体が分断されているような印象を受けます。ただ、横浜というまちには、さまざまな要素が混在しているため、その点を踏まえると、あとはデザインの工夫次第だと思います。</p> <p>例えば、1枚のイラストの中に複数のゾーンがあり、それぞれに森、農、緑といった要素が際立っていて、「これが横浜です」と表現できるような構成が理想的です。もし、それらを切り分けてしまうと、かえって不自然な印象になってしまいます気がします。</p> <p>(金井委員) そうですね。そうした要素がつながっていることが横浜の魅力ですからね。</p> <p>(大竹部会長) まさにそのとおりです。これは恐らく、デザインの話になるとと思いますが、そうしたつながりを表現できるような構成にして、例えば、森、花や緑などのスペースに子どもたちが色を塗れるようにすると、「かわいいから持って帰りたい」と思ってもらえるような仕掛けにもなるのではないのでしょうか。</p> <p>そう考えると、やはり最終的にはデザインの工夫が鍵になると、皆さんの意見をお聴きして、あらためて感じました。</p> <p>(北原委員) そうですね。森があり、谷戸田があり、そして、市街地があるというような、基本的な都市構造があると思います。それらが自然につながっていて、それぞれのパーツに色を塗れるような構成になっていけば、つながりや循環のイメージが感覚的に伝わるのではないのでしょうか。</p> <p>(河原委員) 例えば、イラストの端のほうに、横浜らしいみなとみらいや港のような要素が描かれているといいかもしれません。</p> <p>ランドマークタワーから眺めたときに、森が広がっていて、田んぼがあって、緑があって、それでも、「ここは横浜なんだ」と分かるような構成になっていると、より横浜の森らしさが伝わ</p>
--	---

ると思います。

(大竹部会長) 横浜の緑の魅力については、皆さんからいつも教えていただいている、「確かにそうだな」と思うことが多いです。パッと見ただけでは、横浜には畑や森のイメージはあまりないのですが、実際には、「住空間と森や農の空間が自然に融合するようなまちづくりをしていることが横浜の魅力だ」と、皆さんがいつもおっしゃっているので、それが伝わることはとても重要だと考えています。

私たちが伝えたいことだけをしっかりと伝えて、あとは、デザインの工夫を含めてお任せするという形になると思います。

(事務局) 少し確認させてください。このポストカードは、実は切るとしおりになるような仕掛けがあります。そのため、全体が一連の構成になると、しおりとして切り離した際に、絵や情報が分断されてしまう可能性があります。

(大竹部会長) ただ、それも恐らく、デザインの工夫次第だと思います。それぞれの要素がつながって、横浜の全体像を構成しているイメージで、例えば、こちら側の中心に森のゾーンを配置するなど、そうした構成も工夫次第で十分にデザインとして成り立つように思います。

(北原委員) しおりという形式にこだわる必要はないかもしれませんが、このサイズ感は文庫本などに挟める大きさなので、切らずにしおりとして扱うのも一つの方法かとも思います。ただ、「塗る」、「切る」といったアクションは、体験として記憶に残りやすく、作業中に内容をより意識して読むことにもつながります。そういう意味では、「切る」というアクションがあってもよいと思います。

(大竹部会長) どこを切り取ってもかわいらしいデザインなるような構成にすることはできると思います。また、必ずしも区分けする発想にこだわらなくてもよいのではないかという気もします。それでは、あとは河原委員、よろしくお願いします。

(河原委員) はい。

(大竹部会長) 次は、キャッチコピーについてです。先ほど、候補が五つ上がっていました。「横浜」という言葉を入れたほうがいいのではないかというご意見もありましたし、他にもさまざまな案が出ました。ここで一度、方向性を整理して、ある程度まとめておいたほうがよいのではないかと考えています。

(事務局) そうですね。必ずしも候補そのままである必要はなく、幾つかの候補を組み合わせたり、別の文言を加えたりしても構いません。簡単に、「キャッチコピーはこうしましょう」といった形でご提案いただけると助かります。

(北原委員) 制度の認知を目的とするなら、「はじめての横浜みどりアップ」といった表現が適していると思います。まずは知ってもらうことが重要です。

(大竹部会長) ありがとうございます。他にご意見はありますか。

(河原委員) 「みつけて 横浜のみどり」などはいかがでしょう。みどりアップ計画の存在を知ってもらい、それを見つけて参加してもらうことで、楽しさにつながると思います。

(北原委員) 「横浜」については、私は漢字表記のほうが良いと思います。

(大竹部会長) 他の皆さんはいかがですか。何かご意見はありますか。

(河原委員) 「はじめての横浜みどりアップ」のほうが分かりやすいでしょうか。「見つけて」と言われても、「何を見つけるのか」と疑問に感じる方もいるかもしれません。

(大竹部会長) ご意見ありがとうございます。  
これまでのご意見を踏まえて、一度、多数決を取りましょう。「このキャッチコピーが、より多くの市民に『みどりアップ計画』の取組を知っていただくきっかけになるかどうか」という視点でご判断ください。

それでは、順に確認していきますので挙手をお願いします。

「はじめての横浜みどりアップ」がよいと思われる方はいらっしゃいますか。

「みどりであそぶ」はいかがでしょう。

「みどりはっけん！」。

「こんなにいっぱい 横浜のみどり」はどうですか。

「みどりのタネ、わたしたちのゆめ」。

多数決の結果、「はじめての横浜みどりアップ」が最も支持を集めたようです。

やはり、皆さんの強い「横浜愛」と、みどりアップ計画を市民の方々にぜひ、知ってほしいという思いが反映された結果だと思えます。市民推進会議委員の総意として、このキャッチコピーを提案いたします。ご検討をよろしくお願いします。

最後に、裏面に記載する内容についても、ご意見やご質問があれば承りたいと思います。冒頭でもさまざまなご意見をいただいておりますが、追加で「これだけは確認しておきたい」、「この意見はぜひ、伝えたい」といったことがあれば、お願いします。いかがですか。

(金井委員) 先ほど、どなたかもおっしゃっていましたが、全体的に文字量が多い印象を受けます。気持ちは理解できますが、対象が子どもとなると、少し難しいのではないかという感じがします。

(大竹部会長) できるだけ文字量は少なくしたいですね。  
他の皆さんはいかがですか。

(飛田委員) チラシの対象は小学3年生以上と、正式に決まっていますか。

(事務局) まだ決まっているわけではないです。実際に色塗りなどの作業を行うのは、小学生よりも、むしろ保育園児など、もう少し低年齢の子どもたちになる可能性が高いと考えています。

	<p>(飛田委員) それでは、このチラシの文字を読むのは保護者ということになりますか。</p>
	<p>(事務局) そうですね。</p>
	<p>(飛田委員) 「はじめての横浜みどりアップ」という表現は、保護者が見たときにストーリーとして成立すると思います。例えば、福岡から引っ越してきた方が、『はじめての横浜みどりアップ』って何?と興味を持ち、「なるほど、こういうことか」と納得するような流れです。 ただ、やはり文字が多い印象は否めません。</p>
	<p>(河原委員) 思いが少しこもりすぎているかもしれませんね。</p>
	<p>(金井委員) 文字量は、現在の半分程度に抑えるくらいでちょうどよいのではないのでしょうか。</p>
	<p>(大竹部会長) そうですね。「横浜みどりアップとは」といった導入の仕方や、「周りでできるみどりの体験」、「未来をつくるみんなのアクション」といった表現を通じて、「これは自分にも関係のあるものだ」と感じてもらえるような構成が望ましいと考えます。 その役割を「葉っぱーちゃん」に担ってもらうような形にして、極力、文字量を減らし、詳細は2次元コードで誘導する方式が効果的だと思います。</p>
	<p>(河原委員) 以前から気になっているのですが、「みどりアップ計画」と「みどり税」とが必ずしも結び付いていない印象があります。「あなたが支えている」というメッセージを加えることで、制度の理解が深まるのではないかと考えます。「みどり税を徴収しています」、「みどりアップ計画があります」と言われても、それがつながっていることが理解されていないのが現状です。 「みどりアップアクション」という言葉は区役所などでも頻繁に使われていますが、「アクションをやります」と言われても、「アクションとは具体的に何を指すのか」が分かりづらいと感じます。 そのため、「みどり税を財源として活用しています」といった説明が、たとえ小さな文字でも記載されていれば、「横浜のみどりアップはこういう仕組みなんだ」という理解が進むと考えます。 先ほど、大竹部会長がおっしゃっていた「みどりアップとは」という導入や、「みどり体験はこちら」といった案内は、視覚的にも分かりやすく非常に良いと思います。さらに、「わたしにもできるみどりのAction」という項目の中に、「この活動はみどり税によって支えられています」といった文言を加えることによって、「自分の税金がここに生かされているのか」という実感いつながるのではないのでしょうか。 やはり、「これは自分がやっているんだ」という、自分事として捉えてもらえる構成が重要だと考えます。</p>
	<p>(大竹部会長) 市民全員が緑税を負担しているわけですから、誰もが自分事として捉えるようにしたいですね。</p>
	<p>(河原委員) そうですね。みどり税を市民全員が負担しているわけですか</p>

	<p>ら、さまざまな取組に参加してもらいたいし、制度の内容についても、もっと理解してほしいというところが一番の目的だと思います。その意味でも、「みどり税」と「みどりアップ計画」の関係性を明確にすることが非常に重要だと思います。</p>
(事務局)	<p>そうすると、左側に「みどりアップとは」を配置し、中央に「みどりの体験はこちらから」と「わたしにもできるみどりのAction」を組み合わせた形にし、右側には「みどり税」に関する内容をまとめるという構成はどうでしょうか。</p>
(河原委員)	<p>「みどり税」についてはそこまで重く扱わなくてもよいかもしれません。</p>
(金井委員)	<p>そうですね。軽く触れる程度で十分だと思います。</p>
(河原委員)	<p>「みんなで守っているのだから、みんなで楽しもう」という程度の表現がいいのではないのでしょうか。</p> <p>「楽しもう」といった前向きなメッセージと共に、「みどりアップ計画は、あなたの税金で支えられています」といった一言があるだけでも、十分に伝わると思います。</p> <p>長い説明は不要で、「みどり税はここに生かされています」など、簡潔な表現で構いません。「あなたが支えている」、「みどり税がここに活用されています」ということに気付いてもらえればいいと思います。</p> <p>三つに分かれた紙面構成は非常に良いと考えます。加えて、二次元コードの下に小さな文字で、「みどり税を使っています」や「あなたのみどり税が支えています」といった文言を添えるのもいいかもしれません。</p>
(大竹部会長)	<p>納税そのものがまさに市民のアクションであるということですね。みどりアップ計画の取組を自分事化してほしいですね。</p>
(河原委員)	<p>そうですね。そうすれば、このチラシを無造作に捨てることなく、一度は目を通してもらえると思います。現在は、自分がみどり税を払っていることにも気付いていない市民の方も多いですからね。</p>
(金井委員)	<p>実際、ほとんどの市民がそうだと思います。</p>
(大竹部会長)	<p>それは、本当に重要な点だと思います。市民一人一人がこのまちを守り、担い手として関わっているという意識を持つことによって、先ほど話題に出た市長選のような場面でも、横浜の競争優位性につながると考えています。</p> <p>ただ、現状はまだ、その自分事化が十分に浸透していません。正直なところ、私自身も全く知りませんでした。</p>
(金井委員)	<p>私も全く知りませんでした。</p>
(河原委員)	<p>私も同じです。ただ、知ると、「もっと多くの人に知ってほしい」と思いましたし、「せっかく良い取組をしているのに、なぜ知られていないのか」と疑問に感じました。</p>
(金井委員)	<p>こうした取組は、日本国内でも他に例がないのですよね。</p>

	<p>(大竹部会長) それだけでも、非常に価値のあることだと思います。</p> <p>(金井委員) もっと積極的に広報すべきだと思います。</p> <p>(河原委員) そうですね。 先日、テレビ東京の番組を見ていたら、「東京都は都のお金を緑を守っています」といった内容の、非常に完成度の高いVTRが流れていました。それを見て、「横浜もこうした広報を展開できたらいいのに」と思いました。</p> <p>(金井委員) 東京は財政にゆとりがありますからね。</p> <p>(河原委員) 確かに、資金力の差はあるかもしれませんが、「税金で緑を守る取組をしているのは横浜だけだ」と、あらためて思いました。</p> <p>(金井委員) まさにそのとおりですね。</p> <p>(河原委員) 「日本初の試み」として打ち出すのも一つの方法ですし、「未来のための財源はあなたの一つの行動から」といった表現でもよいのではないかと思います。税金を納めていることをネガティブに捉えず、もっと前向きな形で伝えるべきです。だからこそ、ワンアクションで十分なのです。</p> <p>(大竹部会長) 「守っている」、「支えている」といった言葉で、みんながやっている、ということが伝わるようにしたいですね。 それでは、「もう少し積極的に打ち出していく」というのが、委員の皆さんの総意であると受け止めました。 時間もかなり押していますので、この辺りでご意見・ご質問の時間を終了します。 本日の次第は以上となりますので、これから先の進行は事務局にお返しします。よろしく願いいたします。</p> <p>(事務局) ありがとうございます。 本日いただいたご意見を基に構成を進めてまいります。主担当の河原委員にはあらためてご連絡いたします。</p> <p>(河原委員) よろしく願いします。</p> <p>(事務局) 次第の「その他」について、ご説明いたします。</p> <p style="text-align: center;">(事務局説明)</p> <p>(金井委員) この「森の楽校」というのは、学園祭の際に開催されるものなのですか。</p> <p>(事務局) 必ずしも学園祭に合わせて開催されるものではありません。</p> <p>(金井委員) しかし、取材に行くということは、何らかのイベントが行われているということですね。</p> <p>(事務局) そのとおりです。「森の楽校」のイベントとして、大学が主催</p>
--	--

	<p>するものです。</p> <p>(金井委員) 「森の楽校」の開催時期は、大学によって異なるということですか。おおよそ、いつ頃の開催になるのでしょうか。</p> <p>(事務局) おおむね 11 月頃です。</p> <p>(金井委員) 11 月ですね。分かりました。</p> <p>(事務局) 事務局からのご連絡は以上です。  本日は貴重なご意見を多数いただき、誠にありがとうございました。  これをもちまして、第 60 回広報・見える化部会を終了いたします。本日はどうもありがとうございました。</p> <p>(一同) ありがとうございました。</p>
資料 ・ 特記事項	次第 資料 1 市民目線での情報提供のあり方について